

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第809号 平成26年9月26日

## ノーマライゼーションへの遠い道

最近、全盲の障がい者が見ず知らずの人間から攻撃されるという事件が相次いで発生した事は、人々の心の荒み、劣化というものが如何に深刻か、改めて示しています。

8月28日に発生した事件は、さいたま市に住む全盲の61歳の男性が連れていた盲導犬オスカー（ラブラドルリトリバー）が、何ものかに刺されたというものです。

傷はフォークのような尖ったもので4か所も刺されていたとの事で、オスカーはさぞ痛かっただろうなと思います。

男性は「聴力に自信があるが、事件には全く気付かなかった」と述べています（8月29日付北海道新聞から）が、訓練で街中では無駄吠えしないよう訓練されているとはいえ、吠える事もせず男性をエスコートし続けたオスカーの姿を想像すると、健気で、涙が出て来ます。

埼玉県警の武南署は、現在、浦和駅周辺の防犯カメラを分析し、手がかりを探しているとの事ですが、一日も早く犯人が捕まる事を願っています。

もう一つの事件は、9月8日、JRの川越駅で全盲の女子生徒が蹴られ怪我をしたという事件です。

この事件は、埼玉県立特別支援学校の高等部専攻科に通う全盲の女子生徒が、JR川越駅構内で何者かに足を蹴られ、3週間の怪我を負ったというのですが、その時の状況は、午前7時50分ごろ、女子生徒が白杖を使いながらJR川越駅構内の点字ブロックを歩いていたところ、前方から歩いてきた人物に白杖がぶつかったそうです。女子生徒は相手が転倒する気配を感じたそうですが、その直後その人物とみられる足音が近づき、背後から右膝の裏を蹴られたといえます。

女子生徒は、そのまま登校したものの、恐怖心から事件の事を告げられず、帰宅後に病院で治療を受けたけれども、授業にも支障が出た事から、9日になって学校に届け出たとの事です。

そもそも白杖をついて歩いている人は目が不自由な訳ですから、そのような人が自分に向かって歩いて来た場合には、道を開けるのが当然のマナーです。中には、白杖が危ないとか邪魔だとかクレームをつける人がいると聞きますが、白杖に対する理解のなさに驚きます。

今回の事件では、女子生徒が前方から歩いて来た人とぶつかったとありますが、それは多分、相手が歩きスマホでもしていたのではないかと思います。仮に、歩道上を歩きスマホしていたとすればその事自体が非常識なのに、自分が転んでしまった腹いせに全盲の子の足を蹴ったのだとすれば、決して許されるものではありません。

今二つの事件を紹介しましたが、この二つの事件に共通しているのは、

- 攻撃の対象が全盲なので、自分は見られる恐れがない、
- 自分から何を仕掛けても、相手は抵抗も、反撃も出来ない事を分かっている、

という事だと思いますが、全く目が見えない状態で、突然誰かから攻撃を受ける事の恐怖は、容易に想像がつくはずで、それだけに、そうした行為の余りの卑劣さに言葉を失います。

現代社会は、ノーマライゼーション社会の実現が大きなテーマになっています。しかし、今回のような事件を垣間見る限り、ノーマライゼーション社会の実現は容易ではなさそうです。

ノーマライゼーション社会というのは、障害者基本法が規定しているように、全ての国民が、障がいの有無によって分け隔てられる事なく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の事（同法第1条から）をいいますが、こうした社会を築くためには、国や自治体の努力のみならず、一人ひとりの国民がノーマライゼーションの趣旨を良く理解し、ノーマライゼーション社会の実現に寄与し得るよう努力しなければなりません。

そのための第1歩は、「自分が障がい者になった時にして欲しいことをする」事であり、そのために少しの優しさや勇気を持つ事だと思います。

今回事件を起こした当事者達には、その少しの優しさも、自分の卑劣さを押し止める小さな勇気もなかったのだろうと思と、非常に残念であり、寂しく思います。

（塾頭：吉田 洋一）